



NO. 21

平成16年  
2004  
9-10

江戸東京博物館友の会会報

# 今年度の活動本格化・イベントめじろ押し

——セミナー、古文書講座、見学会、バスツアーなど——

## NHK 葛西アナ「江戸と上方」では新しい試みも

4年目を迎えた江戸東京博物館友の会は、定期総会から3ヵ月、その活動もこれからいよいよ本格化します。

特にセミナーはこれまでより回数も多く、土・日開催も考慮しました。9月～11月では、「江戸と上方—その暮らしと文化」(9/19)をはじめ、「伊能家から見た伊能忠敬」(9/26)、「お札になった樋口一葉」(10/2)、「戦時下における放送の役割」(10/16)、「昭和天皇の料理人」(11/3)、「江戸/東京の狛犬あれこれ」(11/11)と続きます。

中でも「江戸と上方—その暮らしと文化」は新しい試みで、友の会セミナーとしては初めてホールを使用し、会員や同伴者以外の一般の方にも広く公開しようとするものです。どうか、お友だちやお知り合い

の方にも声をかけていただき、連れ立ってご来場ください。

このほか、好評の古文書講座の第2期が入門、初級(1)、初級(2)の3講座体制で10/13からスタートし、見学会も「相撲史跡探訪・その1」(10/9)が行われ、「大(Oh!)水木しげる」展の特別内覧会(11/5)も予定されています。

さらに昨年度も好評だったバスツアーが「伊能忠敬」セミナーとも連携して、「北総探訪—成田不動と小江戸佐原と伊能忠敬」として11月13日に行われます。

いずれも申込締め切りなどの詳細は本号9頁以降の「事業部会だより」をご覧ください。これから本格化する友の会活動に対し、会員の皆さんのが積極的なご参加とご協力が期待されるところです。

### ●会員更新手続きのお願い●

友の会は会員の皆様によって支えられています。会員資格は1年です。まもなく有効期限の終了を迎える方には「継続手続きの書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。  
■更新しませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

### 目次

- ◆特集「わたしとお江戸」 ..... 2  
菊地ひと美・桐井聰男・佐藤幸彦・高橋保・田中勉・柳下重雄・八幡康久
- ◆見学会「江戸四宿を歩く」 ..... 6  
一品川編 1 —
- ◆特別観覧会  
「エルミタージュ美術館展」 ..... 7
- ◆江戸博クリップ 小山周子 ..... 7
- ◆名店めぐり 〈13〉 ..... 8  
萩原竹製品製作所
- ◆会議・会合日誌 ..... 8
- ◆事業部会だより ..... 9
- ◆えど友サークルメンバー募集／会員優待／企画展予告 ..... 12

■会報「えど友」は、会員の皆様と友の会を結ぶ情報誌です。ご意見・ご希望・ご投稿など、ぜひお気軽に寄せください。

■友の会のホームページ「えど友」Web版は、事情により現在休止しています。早期の再開をめざして編集・制作を進めておりますので、いましばらくお待ちください。

## 特集・わたりとお江戸

友の会の仲間にはいろいろな方がおられ、それぞれに得意な分野をお持ちです。

今回は原稿をお寄せいたいた7名の方がたにご登場いただき  
その一端をご紹介します。きっと、新しい発見があると思います。

### 江戸絵師が描く“大江戸絵巻”

菊地ひとみ



2年前に日本橋一帯に出現したストリートアート“大江戸絵巻”的絵師が私です。

これは工事現場の仮

囲いなのですが、それを東京の都心らしくカッコよく行こうといふもの。日本橋という江戸の中心地であったブランドイメージも生かして、江戸の賑わいを長大なパネルで見て頂いております。

江戸の大店越後屋、現在の日本橋三越新館では、お歯黒など“江戸のおしゃれ”を、オープンしたばかりの超高層ビル「COREDO(コレド)日本橋」には“江戸の商い”、超高層ビル建築中の室町三井新館には「江戸名所図屏風」が描かれています。

そして隣のクラシックなビル三井本館の歩道前には、私の「江戸日本橋絵巻」(横30m)が、この4月から出でています。これは、歩道を歩きながらお楽しみいただこうと思い、私の秘策が込められています。

一つは高札場、魚河岸、大店ストリートなどを描きこんだ“日本橋名所図絵”としました。二つめは楽しい物売り達も大勢登場させた“職業尽くし”にもなっています。傘・雪駄問屋、白粉薬種問屋、かんざしを板に貼った小間物売り。貸本屋、あんけらこんけら糖売り……など解説文も入っていますので、ぜひご家族連れ立って、または一人でニンマリしていただければ幸いです。

そしてビッグニュース！ この「江戸日本橋絵巻」が、

JR両国駅から江戸東京博物館を結ぶ1階玄関入口への通路に、日本橋旦那衆の皆様から寄贈されることになりました。五街道の基点でもある日本橋から、同じものを新たに江戸博へと贈られます。

江戸博と江戸の中心・日本橋。縁も深い両者で、私の江戸絵巻を皆様に見ていただくことができ、たいへん嬉しいです。ぜひ、どちらもご覧くださいませ。

(写真の背景は菊地さんの描いた“大江戸絵巻”的一部)

『クロワッサン』2004.6.10号より)

### 市町村合併と地名

桐井聰男



ここ数年、いわゆる“平成の大合併”という時流にのって、耳なれない新しい市町村が誕生し、その反面由緒ある地名が記憶から遠ざかりつつある。

私たちが日々新聞・テレビ・ラジオ

で耳にする町の名にふと郷愁を覚えることがある。一体この地名とは何であろうか。これについてはさまざま人文科学の分野で探求され、歴史の謎の部分に光が当てられてきている。

古くは「古事記」「日本書紀」において、各々の記述には信頼し得ない個所も多くあるが、信頼されている部分は地名である。地名とはいわば長く続いている伏流水であり、いたずらに改定してはならないはずである。それは屋久杉が神聖視されているように、長い歴史が埋められている玉手箱なのだ。

例えば田無市と保谷市との合併により生まれた西東京市、ただ頭に西を冠し東とは本来正反対にあるものに名称を付けたのだが、田無は武藏野台地の中央部に位置し、田を耕作できにくいとの意である。保谷はかつて「保屋」と称され、「保」は古代の行政区画の名残である。夫々の土地の歴史がただ東京都の西郊にあるだけで、西をつけられたという。本来西(west)はギリシャ語のwesperos(夕暮れ)から来た言葉だとも言われている。

また合併で歴史が分からなくなる代表的なケースとして栃木県北部の氏家町、喜連川町がある。氏家は「和名抄」に氏家郷とみえ、氏とは現在私たちに用いられている苗字・名字のもとである。喜連川は「来て連れ添う」から「狐川」にさらに「木連川」へ訛化し、足利氏一族の館跡でもある。これが来年3月には「さくら市」になるという。これでは日本の地名の歴史は消滅するのではないか。

ともかく機械的なのか、あるいは利便性からか、または経済優先を意図したのかは不明である。恒久性を保てるように、そして歴史(地形)を充分に検討し、あらゆる人の意見を尊重すべきである。

最近、千葉市と四街道市の合併について、住民投票では反対意見が多数を占めたという。これは両市の歴史が、そして市の成立方が全く異なるもので、反対多数は当然であると思う。ちなみに千葉の名称の通説は葛の葉が茂っていること、アイヌ語で船の多いところ「チババ」が訛ってチバとなったといわれている。四街道はかつて畔田(クロダ)といわれた農業の町であり、アイヌ語説と農業中心の畔田とは、その同一性を認められるものはない。

## 江戸の感電体験とエレキテル

佐藤幸彦

冬の晴れた日など、マイカーのドアにさわったときに、ビリッと電気ショックを受けたことがあるでしょう。

欧米のホテルに泊って、厚いカーペットの長い廊下を歩いて自室にたどり着き、ドアに鍵を差し込もうとしたら、火花が出て大きな衝撃が走った経験を持つ人は多いと思います。

空気の乾燥した地域の、特に王侯貴族やお金持ちは家のに住む人々は大変でした。ドアにさわってビリッ、握手してビリッ、抱きついてビリッ、ダンスの相手が変わった

ビリッ、水道の蛇口でビリッ、暗いところで肌着を脱いだらピカピカピカッというぐあいに、のべつ感電していたのです。

そういう人々は早くから漠然と静電気という

ものを認識し、どういう時に電撃が強いか、電撃を弱めるにはどうすべきなのかを、悟っていたはずです。

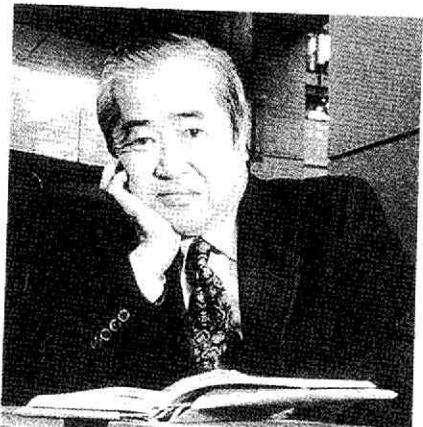
さて、我らの先祖は感電の経験があったでしょうか。落雷の被害は別問題です。あれは神の仕業なのですから。日本は湿度が高く、家屋や内装材(ふすまや畳)は適度に水分を含みます。足は素足に近い状態で、つまり電気回路的には、建物も内装も調度品も人間も全部接地しているので、沢山の静電気が溜まる余地はありません。

恐らく江戸時代以前の人は、衣服の着脱の時にパチパチ音がしたり、暗闇でぼんやり光るぐらいしか、帶電の経験がなく、ビリッと感電を経験した人は、我らの先祖には皆無だったのではないかと思います。

エレキテルはヨーロッパでは恐らく子供の玩具程度であったのに、我が国では大人の興味の対象として十分効果があったのは、上記のような生活環境の差、言うなれば感電経験の差ではなかったかと思うのです。

エレキテルの見世物のスタンダードナンバーとして、20人くらいの人に手をつないで輪にならせ、両端の人間にライデン瓶(蓄電器)にさわらせ、全員を電気ショックでしごれさせる、というものがあります。この実験は源内のエレキテルより約40年後に大阪の医師橋本曇斎が行って人々を驚かせたと言われます。

平賀源内のエレキテル装置の起電器は、ガラス瓶の外面にスズをはり、中にくぎをつめてそこからリード線を出していたと言われます。瓶をハンドルで回転させてその外面を摩擦し、静電気を発生させたわけですが、その構造は多分源内は蘭書の通りに作っただけなのでしょうが、起電器と蓄電器を結合した形になっていました。ただ蓄電器として容量が小さかったのか、源内のエレキテルは火花が見えたり紙が飛ぶ程度のものだったと、源内より19歳若く、そして源内を尊敬



していた司馬江漢が記しています。

橋本疊斎の装置にはれっきとしたライデン壇が使われていたと見るべきです。日本の環境は、静電気についての認識や興味に関して著しくマイナスでした。

リンゴの苗木が日本に来たのは、明治になってからだそうです。それで日本人の万有引力に対する認識は遅かった-----なんてことはありませんよね。

## 「江戸しぐさ」は躾の原点

高 橋 保

日本人は子供のころから、優しさ、美しさ、勇気、忍耐、義務、奉仕、孝行などを家庭で躾（しつけ）られてきました。

昔の日本は貧しかったので、大概の親は生活に追われて、教育の上手な人はまれでした。

その代わり習慣として実行していましたから、子供は親の後ろ姿を見て覚えました。それが社会のルールで、それを守れない子がいれば、親が笑われました。

敗戦後の混乱や西洋文明への憧れ(あこがれ)から「日本の心」はポイ捨てされました。貧しさの中で江戸の人々は明るく、楽しく暮らしておりました。私が浅草育ちだから言うわけではありませんが、今もその気つ風の残っている人が多いのです。多少、泥臭いと見られますが、六本木や汐留では味わえない人間臭さがあります。流行の先端はジャズやタンゴ、オペラ、レビューも浅草からで、今ブラジルサンバで人気を呼んでいるのもその名残です。

21世紀は「心を求める」世界になると思います。資本主義が豊かさ一辺倒だったの反省して修正の時代になると、日本の時代になります。そのとき“江戸しぐさ”はとても参考になります。ただし時代や環境が変わって「宵越しの金は持たねえ」とか、「親のために身を売る」などは通用しませんから、その点は真似しないでください。

戦後の焼け野原のがれきの下からタンポポが咲いてい



ました。「花は己の美しさを識らず、されば花は麗わし」(武者小路実篤)。

「アラきれいだ」と、思う優しい心、それが日本の心です。三代続いても、変な人もいます。要はしぐさに表れた気つ風が大切なのです。

## 江戸の酒「剣菱」の系譜

田 中 勉



江戸で一番有名な酒といえば、先ず「剣菱」(けんびし)が挙げられるだろう。

川柳に「すき腹に剣菱えぐるように利き」と詠まれている。

元禄年間(1688~1703)

以前から、伊丹の稻寺屋治三郎が醸造する「剣菱」は、

江戸に積み出され多くの人々に愛飲された。

しかし、元禄調高を基準とした以後、減醸規制が強化され酒屋仲間の申し合わせを破って江戸へ積み出しをしたため、訴えられて以後、この仲間制裁により急速に没落するわけではないが、享保年間(1716~1735)には伊丹の酒造家仲間から名前が消えている。

その後、「剣菱」の銘柄を引き継いだのが、津国屋勘三郎である。姓は坂上を名乗った。文化、文政、天保と江戸文化が爛熟した時代、その酒銘はとどまるところを知らず江戸一番の銘酒ともてはやされた。しかし、江戸幕府が倒れ明治新政府となり酒造営業特許を失い酒造経営から手を引いていく。その後を継いだのは、稻野利三郎である。明治5年(1872)創業で明治30年(1897)には四千石を醸造したが、4年後には廃業した。

酒銘は池上茂兵衛に引き継がれて、大正元年(1912)には2蔵で千二百石余を醸造するが、その後は1蔵となり六~七百石を醸造するに過ぎず、昭和元年に酒造人名義変更をした後に廃業した。そして、「剣菱」の酒銘は伊丹から灘に移り現在の剣菱酒造(株)に受け継がれている。

頼山陽が「剣菱」を愛し、生涯この銘酒を絶たなかつたことについては、いろいろと逸話もあるが、山陽を「剣菱」の醸造元・坂上勘三郎に紹介したのは、大阪の儒者・篠崎小竹であった。

ある日、小竹が山陽を連れて大阪から伊丹に赴くと、ちょうど秋のキノコ狩りの時節だったので、道行く人が「お二人とも伊丹のほうへいらっしゃるようですが、松茸狩りですか？」と聞いた。すると山陽は「イヤ酒狩りさ」と即座に答えて、笑いながらさっさと行き過ぎていった、と『酒通』にある。

[参考文献]『伊丹市史』『酒通』『酒の民族文化誌』

## 江戸の下水道管理

柳 下 重 雄

江戸の下水道は、道路脇の側溝（どぶ）がほとんどでした。この側溝が下水道として機能することで、町の衛生、道路、船運に大きくかかわっていたのです。

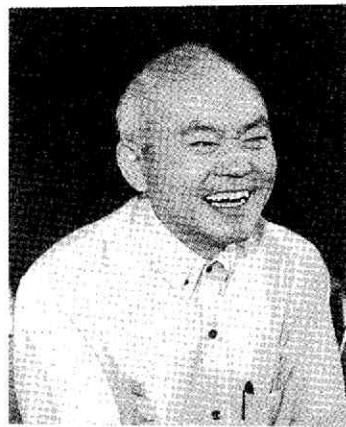
下水は隅田川、神田川などにそのまま流れ出ていました。当時、大小便は大切な肥料ですので流していません。

江戸の道路は土が丸出し。せいぜい砂利を敷いて固めた程度。当然、泥や砂利が雨水と一緒に下水道に入っています。また、下水道にごみを捨てる輩が多かったようで、「下水道にごみを捨ててはならない」という奉行所のお触れがたびたび出されています。下水道や河川の浚渫（しゅんせつ、水底をさらって土砂などを取り除くこと）をうながすことも頻繁でした。下水からの土砂で河川が浅くなると、当時の物資輸送に重要な役割を果たしていた船運に支障が出るからです。

下水の河川への吐け口には、泥溜を作ったり、丸太などを一定の間隔で横一列に下水の中に打ち込んだりしています。いずれも土砂やごみを捕捉しようとするものです。

江戸の町並みを建設する時、幕府は下水道も同時に作つたのでしょうか、その後の維持管理は、下水道を使用する町人や武家が費用を負担することで行っていました。

このため、費用負担割合をめぐってのもめごとが、ちよくちよく起っていました。たとえば、河川への下水の吐け口のある町に、町奉行所が下水の浚渫（しゅんせつ）を命じたところ、このごみや泥は上流の町から流れてきたものなのだから、上流の町々にも費用負担させるべきだ、と町奉行所に抗議をしたなどです。



また、下流の町で下水の一部を埋め立てたため、上流の町の道路に下水が溢れてしまい、上流の町が町奉行所に苦情申し立てをした、などという例もあります。

このような事例が「神田大下水小下水」という古文書には21項目にわたって記録されています。各項目を読みますと、江戸時代も現代も、世相はあまり変わっていないなと感じます。

## 遺跡発掘調査の実際

八幡 康久

遺跡の発掘調査にかかわってから、14年目になります。私が最初に抱いていた発掘の印象は、テレビで見た竹べらやはけで慎重に掘りすすめる静的な動きでしたが、実際にやってみると、現場は土木工事のような動的なものでした。



最初は調査会に所属して3年弱、その後、発掘支援の会社に移って、現在も続けております。

発掘の現場はほとんどが都内で、近世、すなわち江戸時代の遺跡を多く手がけています。まれにプレ調査でローム層を掘ったり、縄文住居などを掘ったり、弥生住居や方形周溝墓などの調査・発掘もありました。しかし発掘とはいうものの、開発に伴う記録保存調査が大半です。

発掘調査をして記録に残し、調査会や調査団の支援の作業に従事すると、ある程度は遺構や遺物はわかりますが、遺跡の性格や全体像は報告書として形にならないとわかりません。どこかで、その報告書を目にしたときは、とてもうれしくなります。

発掘調査にはたくさんの人や、他の分野の学問の協力が必要不可欠です。冬は寒く、夏は暑く、また雨の日もありますが、日本の四季を楽しみながら発掘をしています。いつかは自分のやってみたい発掘に挑戦したり、学術調査などができるればよいなと思います。

休みの日は、できるかぎり都内や近県の博物館などで企画展示も見ています。体力、気力の続くかぎりは、これからも発掘調査を続けていきたいと思います。

江戸東京博物館友の会 見学会(2004/6/26)

## 暑さの中 大人数で歩いた品川



### 《江戸四宿を歩く》 品川宿一その1



▲品川神社に到着した参加者

往時の宿場町を散策するテーマ企画、見学会『江戸四宿を歩く』の第1回目が東海道の宿場町「品川宿一その1」として6月26日(土)開催されました。

今回の見学会は定員40名に対して180名を超える方から申し込みがありました。総会質疑で全員参加をお約束したことによって、大所帯の見学会となり、参加者の皆様には第1班から第4班までの編成で臨んでいただきましたことになりました。

梅雨入り宣言以降、天候不順が続いている雨降りが心配された当日、雲間からときおり日差しがさし込む大変蒸し暑い日の出発となりました。

12時45分第1班のスタートから15分間隔で第4班13時30分の出発まで順次受付を済ませ、各班とも30名前後の編成でJR品川駅から元気よく出発。当日の参加者は総勢で132名となりました。

第一京浜国道から別れ、八ツ山橋を渡り旧東海道に入りました。今回の見学会は、目黒川を境に南北に分かれていた品川宿の手前の北側を散策するコース。

旧東海道のこの一郭(かく)は港町として栄えた宿場町。神社仏閣や旅籠(はたご)等が数多く集まっていたところで、神社や寺院、品川の海へと通じる横丁が数多く残されており、その横丁の名を今も各所に留めています。

旧東海道に入ってからは、家光と沢庵の問答河岸の碑、幕末史でおなじみの土蔵相模跡を見学した後、本道からそれで、屋形船が浮かぶ品川

浦へ出て、江戸時代の鯨が眠る鯨塚のある利田神社へ。そして、当時の鯨騒動を伝えた「かわら版」の写しを見ながら御殿山下砲台跡へ移動、再び本道に戻りました。

天保の飢饉(ききん)で流浪し、品川宿にたどり着いて死亡した人々を葬った碑のある法禪寺、成田不動を祭った一心寺を経て、大名が宿泊する本陣が置かれた品川本陣跡に到着しました。

行程のおおよそ半分近くのここ本陣跡・聖蹟公園で小休止。しばらく涼を取ったあと、伊豆の左官・長八の「こて絵」が残る寄木神社を回り、南品川の鎮守である荏原神社へ参拝しました。その後、ご神職より社と以前の目黒川との位置関係や荏原神社の歴史を説明していただき、細川家墓域を後に東海寺をめざしました。

東海寺は徳川家光が沢庵和尚を開山に迎えて創建したお寺で、奥行の深い境内など「沢庵屋敷」と呼ばれた往時の面影を残すものでした。

見学コースもいよいよ終盤に入り、官営品川硝子製造所跡を見て東海寺大山墓地に移動しました。この墓地は、かつてここまで東海寺の境内だったところが、寺院の整備でこの一郭にまとめられたものです。現在は両側が鉄道線路に囲まれた特異な位置にありますが、沢庵和尚の墓をはじめ江戸・明治期の著名人の墓が数多く納められていました。

そして最後の見学場所、北品川の鎮守、品川神社に到着です。ここでは各班全員そろったところで、見学時の注意や境内の明神鳥居、陶製狛犬(こまいぬ)などの説明を、また見学コースのおさらいとしてレジュメを見ながら簡単な解説を聞き、拝殿裏手にある板垣退助の墓と、特別公開による宝物殿の見学で締めくくりました。

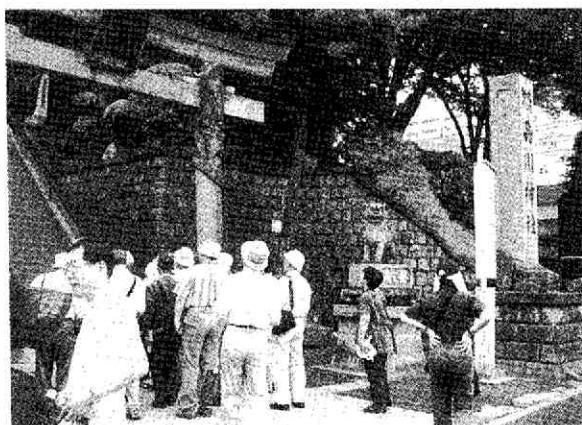
梅雨の晴間に特有の蒸し暑い中で、およそ2時間半にわたる歩行見学、参加者の皆様大変お疲れ様でした。最後に簡単なアンケートをお願いして、ここ品川神社で流れ解散となりました。

なお、アンケートの結果はやはり「説明が聞き取りにくい」という声が多く、何らかの対策が求められています。また、歩くペースについては「もっと早く」と「もう少しゆっくり」の相反する意見があり、難しいところです。その他、開催の時期や時間、具体的な行き先の提案などもありました。

【報告】文：事業部会・安西洵

写真：広報部会・松原良

▼品川神社の宝物殿見学を前に



江戸東京博物館友の会 特別観覧会（2004/7/17）

# エルミタージュ美術館展

## —エカテリーナ2世の華麗なる遺産—

7月17日、企画展「エルミタージュ美術館展～エカテリーナ2世の華麗なる遺産～」の特別観覧会が行われました。飯塚晴美学芸員によるロシアの華麗（かわい）で波乱に富んだ歴史とレーヴィノフ王朝のお話の後で見た、煌（きら）びやかな数々の美術品にすっかり魅せられてしまいました。

第1部は「大国への道」と題され、ここでの主役はピョートル1世とエカテリーナ2世、そしてサンクトペテルブルグです。

ピョートル1世は古い習慣の中に埋もれていたロシアを大国にしようと努力します。

▼解説する飯塚学芸員



スエーデンとの戦いで、バルト海に面したネヴァ河口に広がる泥沼のような湿地帯を手に入れました。これがサンクトペテルブルグです。聖なるピョートルの都、聖なるペテロの近代化のきっかけになる町を造り上げようとしたのです。

エカテリーナ2世は、生粋のドイツ人で、ピョートル3世の妻でした。しかし、無能で宮廷になじまない夫とは反対に、ロシアという国を愛そうと努め、政治や外交のほか美術や文学にも才能を発揮します。

「エカテリーナ2世と宮廷の輝き」と題された第2部は、彼女が帝政ロシアの文化水準をヨーロッパの大国に近づけるために努力し、豪華な世界を手に入れる輝きの物語です。

見所は何といっても黄金の馬車でしょう。彼女が晩年、儀式に赴く際に使った一人用の馬車で、華やかな色彩、贅沢（ぜいたく）で広い車内、ちょっと乗ってみたくなるほど魅力的です。



▲黄金の馬車に見入る参加者

エカテリーナ2世自身が使ったといわれる、ウェッジウッド社製の蛙の紋章入りの陶磁器セット。ケケレクシネン（フィンランド語で蛙の沼）と言う名の蛙の紋章入りの陶磁器も見ものです。

第3部は「エルミタージュ絵画ギャラリー」です。あらゆる面でロシアをヨーロッパの大國と並ぶ国に押し上げたエカテリーナ2世、美術への選択眼に恵まれた彼女が、膨大なお金を使って買い集めた絵画コレクションが展示されています。

なお、5階の企画展示室の大黒屋光太夫以降の日本とロシアの歴史、「江戸幕府とロシア」という展示もあわせてせてご覧になるのも楽しいでしょう。

[取材]文：広報部会・岡橋園子

写真：同・齊藤美香子

## 江戸博クリップ

7月21日から、分館の江戸東京たてもの園で、「水木しげるの妖怪道五十三次一妖怪と遊ぼう」展が始まりました。この展覧会では、複製の「東海道五十三次」と、それを見立て妖怪たちが旅をした様子を描いた「妖怪道五十三次」の原画各55枚を比較して展示しています（9月5日まで）。

前日の内覧会には、作者の水木しげるさんもかけつけて下さいました。

ちょうどこの日は、東京の気温が

39.5度となった記録的猛暑の日。82歳の水木さんを心配したのですが、園内に復元した「鬼太郎の家」を熱心に見るなど、元気な姿にびつ

### 水木しげるさん

学芸員 小山周子

くりしました。でも記者会見では、何をうかがっても「暑い、暑い」とおっしゃっていたのですが…。

水木しげるといえば、「ゲゲゲの鬼太郎」を思われる方も多いでしょう。

私もその一人で、子供のころ「ゲ

ゲゲ」の唄を歌っていました。貸本、雑誌、テレビアニメとメディアは違います。幅広い世代に愛されている作品です。改めてこれを読むと、東京が多く取り上げられていることに驚かされます。都市の街並みや、首相、芸能人など、漫画が執筆されたころの様子が描かれているのです。

11月からは江戸東京博物館でも「大水木しげる」展がはじまります。ぜひご家族でお越しください。妖怪たちもたくさん遊びにくるかも？！

◆このコラムは学芸員の方に執筆をお願いしています。

## すす竹にこだわる「萩原竹製品製作所」

父親の跡を継いで60年、萩原末次郎さんは都内でただ1人のすす竹工芸職人です。

すす竹は、かやぶき屋根を下から支えていた竹が、150~200年という長い年月、いろいろやかまどの煙にいぶされて茶色になったもの。すすやはこりを洗い落とした竹は、独特な茶色に深い味わいをたたえています。

色合いの美しさだけでなく、長年いぶされ乾燥して水分が抜け、変色したり、割れたりすることもなく、梅雨時でもかびが生えません。

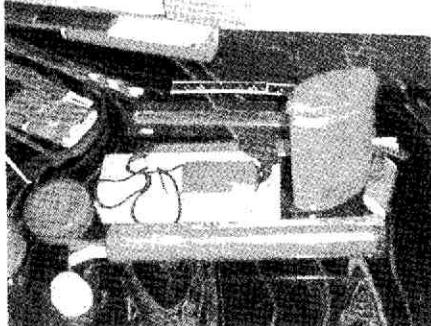
萩原さんは、時には象牙をあしらいながら、茶道具をはじめ、香合、ようじ入れ、たばこ入れ、印籠(いんろう)、はし、フォークなど、100種類以上のものを作ってきました。使う道具は主として小刀、仕上げに

ろうを主体とする磨き粉で磨き上げます。萩原さんは今年80歳。いちばんうれしいのは「お客様に喜ばれたとき」で、この仕事を続けてきてよかったですと思われるそうです。

外食で割りばしを使わないよう萩原さんはしを持ち歩こうという「1膳(ぜん)の会」が、平成11年に作られ、30数人のメンバーが毎年11月11日に集まるそうです。ま



▲お元気な萩原さん



▲印籠やタバコ入れなどの作品

たインターネットで紹介されたため、中学生などの体験学習に日本各地から声がかかり、竹フォークや竹ペンの作り方を教えます。

取り壊されるかやぶきの家がない今、すす竹はもう入手できません。後継者もいません。弟子入りの希望も何件かありました。収入が問題で実現しませんでした。「最後の職人」を覚悟の萩原さんですが、「家で座ってできるので、足の不自由な人にも向いている仕事なんです」と、ボツリと言われました。消えていく技術が愛惜されます。

### ◆問い合わせは萩原さん宅へ

〒125-0041

東京都葛飾区東金町 7-28-51

電話 03-3600-5609

【取材】文：広報部会・大野晴美

写真：同・菅沼和男

## 会議・会合日誌

2004.6.1~7.31

### ◆役員会

・6月10日(木) 18時から開催。総会で出された質疑・提案事項の扱いを協議した。また、友の会の規約改正に関して、総会前にホームページ上に個人の修正案が掲載された件について、事情を調べることを決めた。出席10名。

・7月8日(木) 18時から開催。ホームページの問題について事情調査の話し合い以前に、担当者から退部の申し出があり、ホームページは一時休止に至った旨広報部会から報告があり、なるべく早く再開することとした。その他バスツアーで

の会から補助の考え方などを協議した。出席9名。

### ◆事業部会

・6月3日(木) 18時30分から開催。5月のセミナーの報告、6~7月の予定、担当者の確認のほか6月の見学会(品川)への対応を綿密に打合せた。出席13名。

・7月1日(木) 18時から開催。6月の見学会(品川)についての反省、アンケート結果の検討のほか7月~8月の事業を確認、担当を決定し、9月以降の計画について話し合った。出席16名。

### ◆広報部会

・6月18日(金) 16時から開催。

ホームページ閉鎖に至った経緯の説明があり、今後の再開に向けての対応を協議した。また「えど友」第20号についての総括、第21号の内容と分担、「えど友」配布先の拡大などを話し合った。出席8名。

・7月14日(水) 16時から開催。ホームページ再開への対応、「えど友」第21号の担当確認などを話し合った。出席6名。

・7月29日(木) 18時から開催。ホームページ再開へ向け具体的な段取りなどを話し合った。出席7名。

### ◆総務部会

6月24日(木) 18時から「えど友20号」などの発送作業を行った。出席14名。

## 事業部会だより

友の会活動ご案内です。

### ★★★講座のお申込方法★★★

- ◆はがきに、①講座名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)、④〒住所、⑤電話番号を明記して、右記の「友の会事務局」へ。
- ◆締め切り:各講座の案内をご覧ください(必着)。

- ◆お申込みは、各講座ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込み先: 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局

\*お申込いただきますと、折り返し「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。  
\*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込みをしてからご参加ください。

### 古文書講座

#### 第2期を10月から開講

古文書講座の今年度第2期を10月から開講します。第1期と同様、「入門編」、「初級編(1)」、「初級編(2)」の3講座です。ぜひご参加ください。

ただし、「初級編(1)」と「初級編(2)」はほぼ同レベルですので、初級編へのお申込はどちらか1講座のみとさせていただきます。なお、「入門編」と「初級編」のいずれかとの同時受講は差し支えありません。

◆すでに第1期を受講されている方については、特に不参加のお申出のない限り自動継続となりますので、お申込の必要はありませんが、別の講座を希望される場合には、改めてお申込が必要です。

#### △第2期の日程

- \*入門編 第1回 10月13日(水)  
第2回 11月10日(水)  
第3回 12月8日(水)

- \*初級編(1) 第1回 10月20日(水)  
第2回 11月24日(水)  
第3回 12月22日(水)

- \*初級編(2) 第1回 10月23日(土)  
第2回 12月4日(土)  
第3回 12月18日(土)

- ・開催時間:すべて14:00~16:00
- ・会場:江戸博1階会議室または学習室1・2のどちらか(当日お確かめください)
- ・講師:野尻泰弘さん(学習院大学大学院史学専攻)、小宮山敏和さん(同)、小松賢司さん(同)が交互に担当。
- ・参加費:全3回1000円(初回当日払い=各講座とも)
- ・定員:80名(各講座とも)

#### ・申込締切

- 入門編 10月2日(土) 必着
- 初級編(1) 10月9日(土) 必着
- 初級編(2) 10月12日(火) 必着

【企画担当責任者】山口千恵子(事業部会)

### 見学会

#### 「常設展を見る~大江戸歌舞伎と能」

- ・開催日: 9月5日(日)
- ・お申込は締め切りました。
- ・会場: 江戸東京博物館・5~6階常設展示室
- ・定員: 30名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・参加費: 会員無料。同伴者は常設展観覧料(2割引)。
- ◆常設展をガイドしながら、各々のテーマでスポット解説を行います。江戸ゾーンでは阿国歌舞伎・若衆歌舞伎・野郎歌舞伎、将軍・大名・町人の能を解説、東京ゾーンでは歌舞伎100年史を解説します。

【企画担当責任者】黒瀬雅博(事業部会)

### 友の会セミナー

#### 第19回「江戸と上方~その暮らしと文化」

講師: 葛西聖司さん(NHKエグゼクティブ・アナウンサー)

- ・開催日: 9月19日(日) 14:00~15:30
  - ・申込締切: 9月7日(火) 必着
  - ・会場: 江戸東京博物館・1階ホール
  - ・定員: 400名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 今回は一般の方も入場可の一般公開セミナーです。今からでも間に合いますので、お友だちやお知り合いの方にも声をかけてください。
- ・参加費: 会員200円、同伴者500円(当日払い)  
一般500円(当日払い)

◆今回は江戸と上方の歌舞伎と文楽を中心にして、地域による気風や芸の違いを海老蔵襲名と藤十郎襲名を織り交ぜながらお話しいただきます。

#### ・講師略歴: かさい・せいじ

1951年生まれ。中央大学法学部卒業。NHKエグゼクティブ・アナウンサー。山梨英和大学非常勤講師、日本体育大学非常勤講師。

【企画担当責任者】大倉和寿(事業部会)

## 友の会セミナー

### 第20回「伊能家から見た伊能忠敬」

講師：伊能陽子さん（伊能忠敬7代目洋氏夫人）

- ・開催日：9月28日（火）14:00～15:30
- ・申込締切：9月17日（金）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員200円、同伴者500円（当日払い）
- ◆母の意志を継承して設立された伊能忠敬研究会での古文書整理、解説、保管や地図の保管など、活動のご様子をお話いただきます。

また、今まで不明だった地図が最近海上保安庁で発見されて、すべての伊能大図が揃ったことは記憶に新しいところですが、伊能家の立場から見た伊能忠敬についても語っていただきます。

・講師略歴：いのう・ようこ

伊能忠敬7代目の伊能洋氏夫人。伊能忠敬研究会で活発に活動し、現在に至る。伊能忠敬研究会顧問。

【企画担当責任者】大倉和寿（事業部会）

## 見学会

### 「相撲史跡探訪 その1」

- ・開催日：10月9日（土）13:00～
- ・集合場所：江戸東京博物館（12:45までに集合のこと）
- ・申込締切：9月28日（火）必着
- ・コース：江戸東京博物館 → 野見宿禰（のみのすくね）神社（相撲の神様） → 錦戸部屋（元水戸泉関） → 相撲博物館 → 蔵前国技館跡 → 蔵前神社（江戸時代の本場所開催地） → 正覚寺（かや寺、安芸ノ海の墓） → 龍宝寺（千代の山の墓） → 敬覚寺（羽黒山の墓） → 田原町駅前
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員、同伴者とも500円（当日払い）
- ◆江戸東京博物館に隣接して、国技大相撲の殿堂・両国国技館がありますが、それにちなんで、かつての名横綱の墓など相撲に関連した史跡を巡ります。

【企画担当責任者】藤村武雄（事業部会）

## 友の会セミナー

### 第22回「戦時下における放送の役割」

～2.26事件から玉音放送まで～

講師 松本太郎さん（元NHK放送博物館館長）

- ・開催日：10月16日（土）14:00～15:30
- ・申込締切：10月5日（火）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員200円、同伴者500円（当日払い）
- ◆大正14年日本放送協会（NHK）開局以来、軍部が台頭した戦時下において、特に2.26事件（昭和11年）から玉音放送（昭和20年）までの“魔法にかかった”10年間にスポットを当て、当時のラジオ放送が社会にどのような影響を与え、どう役割を果たしたか、お話をいただきます。

・講師略歴：まつもと・たろう

昭和32年、NHK入局。技術、放送番等を歴任し、奈良放送局長を経て、NHK放送博物館館長。

【企画担当責任者】大倉和寿（事業部会）

## 友の会セミナー

### 第23回「昭和天皇の料理人」

講師：谷部金次郎さん（大阪青山短大特別講師）

- ・開催日：11月3日（水・祝日）14:00～15:30

- ・申込締切：10月22日（金）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員200円、同伴者500円（当日払い）
- ◆「天皇の料理番」のモデルになった秋山徳蔵氏の弟子として、和食を専門とし、昭和天皇、香淳皇后の日常の食事をはじめ、新年祝賀の儀や園遊会などの皇室行事に伴う宮中料理を調理した当時のことなどをお話をいただきます。

#### ・講師略歴：やべ・きんじろう

昭和39年宮内庁に入庁、大膳課に配属。昭和天皇崩御を契機に退職。現在、大阪青山短大特別講師、くらしき作陽大学非常勤講師、(財)佐倉ゆうゆうの里食事顧問。著書に「昭和天皇と饅茶漬」(文芸春秋)など。

【企画担当責任者】大倉和寿(事業部会)

## 特別内覧会

### 企画展「大(Oh!)水木しげる」展

- ・開催日：11月5日(金)18:00  
受付開始は17:30の予定
- ・申込締切：10月26日（火）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室／企画展示室
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員、同伴者とも500円（当日払い）
- ◆「ゲゲゲの鬼太郎」で知られる漫画家水木しげる氏の50年以上に及ぶ画業を、原画、紙芝居、貸本などから振り返り、「妖怪研究家」としても名高い氏が世界中から集めた民族資料や、妖怪が描かれた古い図鑑や絵巻物も公開。「水木しげるワールド」のすべてを見せる「大(Oh!)水木しげる」展です。

## 友の会セミナー

### 第24回「江戸／東京の狛犬あれこれ」

講師：三宅稜威夫さん（日本参道狛犬研究会代表幹事）

- ・開催日：11月11日（木）14:00～15:30
- ・申込締切：11月2日（火）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階学習室1・2
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員200円、同伴者500円（当日払い）
- ◆普段ほとんど注意を払わぬ見過ごしている狛犬（こまいぬ）。その背後には地域や職人（石工）、文化の波及などの歴史が秘められています。いろいろの狛犬を事例にして、その歴史や魅力などを楽しく語っていただきます。

#### ・講師略歴：みやけ・いづお

1938年長野県生まれ。市民文化センター代表。埼玉県落語振興会会长。NHKラジオ深夜便「東京ぶらり旅」に定期出演。

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

## 見学会（バスツアー）

### 「北総探訪—成田不動と小江戸佐原と伊能忠敬」

- ・開催日：11月13日（土）8:30～
- ・集合場所：江戸東京博物館（8:15までに集合のこと）
- ・申込締切：10月20日（水）必着
- ・申込多数の場合は抽選、当選通知は10月25日以降
- ・コース：江戸東京博物館（集合）→成田山新勝寺→旅の駅米屋観光センター（昼食）→佐原市→佐原山車会館→伊能忠敬生家跡→佐原の町並み散策→（香取神社）→江戸東京博物館
- ＊佐原で現地ボランティアガイドの説明付き
- ・定員：125名（バス3台）
  - 同伴者1名に限り可（はがきに氏名明記）
- ・参加費：会員5000円（昼食付き、当日払い）
  - 同伴者6000円（昼食付き、当日払い）
- ◆9月に開催される友の会セミナー「伊能家から見た伊能忠敬」に関連して、小江戸の一つとして知られている千葉県佐原市を訪れ、魅力ある古い町並みと伊能忠敬記念館を中心に見学します。

【企画担当責任者】岩松精(事業部会)

## ご投稿を歓迎！

### ■自由なテーマで、お気軽に■

会員の皆さまからのご投稿をお待ちしています。テーマは江戸・東京に関連したことなら何でも結構です。

趣味や研究、体験談や日ごろ関心を持って調べていること、セミナーや見学会で感じたことなどなど、どうぞお気軽にお寄せください(800～1000字位)。また、写真やイラストも歓迎です。採用分には記念品を進呈いたします。

■ご応募は、①お名前、②〒住所、③会員番号、④電話番号を明記のうえ、⑤できれば顔写真を添えて、友の会事務局まで。

## あなたも楽しく参加しませんか

えど友サークル

メンバー募集中!

前号で「えど友サークル」の設立を募ったところ、右記のお二人の方が手をあげてくださいました。面白いサークルができ、新しい楽しみが増えそうです。

●サークルへの参加をご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名、④住所、⑤電話番号、⑥Eメールアドレスをご記入の上、友の会事務局へお申込みください。多数の方のご応募をお待ちしています。

なお、新規サークルについても引き続き、手をあげる方を募集中です。設立希望の方は事務局へ関係資料をご請求ください。

■申込・資料請求先 130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局  
Tel. 03-3626-9910

### 江戸の理解を深める会

◆趣旨 会報では「特定のテーマ」に関心を寄せる同好のメンバーによる…とありますが、私の提案は「特定のテーマ」には拘らず、「江戸時代や江戸東京の様々な側面、光と影に関心と疑問を持つ会員同士が定期的に集まって意見交換と疑問解消を図り、年1回程度は学芸員諸兄姉にご指導を受ける討論会や研究発表会の開催を図る」というサークルです。ただし、内容はすべてフリーハンド、皆さんの話し合いで決まると思います。

◆発起人（世話人） 野村和正さん

### 江戸三十六見付を巡る会

◆趣旨 かつて江戸市内には、江戸城を中心に城郭が形成されていて、各街道への入口には見付という城門がありました。浅草橋、四谷、虎の門など36もの門があつたのですが、現在はその遺構もわずかになってしましました。そこで改めてこれらの遺跡を探訪し、江戸城を再認識しようという考えです。2ヵ月に1回ほど、順を追って各見付跡を中心にその周辺の史跡を巡ろうと考えています。

■発起人（世話人） 小笠原淑夫さん

### 会員優待のお知らせ

好評開催中！ サンクトペテルブルク古都物語

### 企画展「エルミタージュ美術館展」

#### ～エカデリーナ2世の華麗なる遠遊～

会期 7月17日（土）～10月17日（日）

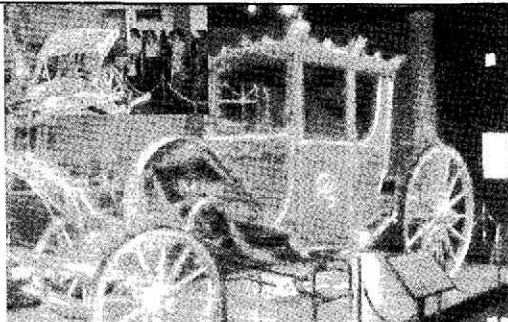
月曜休館（ただし、月曜日が祝日または振替休日の場合はその翌日）

・図録 定価 2200円 会員10%割引

【ご注意】会期中の企画展物販所のみで適用。ミュージアムショップでは割引になりません。

・会員：一般650円、65歳以上320円、大専門生520円

・同行者：一般1040円、65歳以上520円、大専門生830円



### 次回予告 企画展「大(Oh!)水木しげる」展

会期 2004年11月6日（土）

～2005年1月10日（月・祝日）

休館日：年末年始（12/27～1/4）、月曜（1月10日は開館）

図録 定価：未定 会員10%割引（会員証提示）

【ご注意】会期中の会場出口物販所のみで適用。

ミュージアムショップでは割引なりません。

会員：一般550円、65歳以上270円、大専門生440円

同行者：一般880円、65歳以上440円、大専門生700円

### 江戸東京博物館友の会

#### 会報〈えど友〉第21号

2004（平成16）年9月1日発行

隔月（奇数月）刊。次号は11月1日発行予定

編集・制作／友の会広報部会

東京都墨田区横網1-4-1

〒130-0015 電話03-3626-9910

発行人：大松駿一（副会長） 編集主幹：松原良

編集人：菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美

小柳英二郎、斎藤美香子、稻垣武志、岡田守弘